

## 伝統満族集落における街路構成と宅地割の関係 - 中国・新賓満族自治県勝利村の事例研究その3-

満族 集落空間 街路構成  
宅地割

正会員 ○楊 丹\*  
正会員 牛島 朗\*\*  
正会員 中園 真人\*\*\*

### 1. はじめに

前編では 2017 年 10 月に勝利村で民家の内で家屋配置 II、III と IV 型に属する事例を説明した。本論では引き続き、家屋配置 V 型とその他の型に属する事例を説明する。

### 2. 調査事例分析

#### 2.3 家屋配置 IV 型事例

③ 事例 No. 49(敷地面積:849.7 m<sup>2</sup> 主屋面積:81.6 m<sup>2</sup>)

No. 49(図 1)は一世代家族(M67F64)が利用している。敷地の間口(W)は 14.5m、奥行(D)は 58.6m、D/W は 4.0、形は縦で細長い長方形となっている。敷地の南に設ける門と道に接しモデル S-S に属している。家屋配置パターンについて、1 軒の主屋と 3 軒の副屋によって構成される家屋配置 IV 型である。

主屋は 1982 年に半分民家を建替えた間口 12.0m、奥行 6.8m の 3 間建物であり、主屋の前後には保温用のガラス玄関が設置されている。主屋位置として事例 No. 14 と No. 31 と同じほぼ敷地の真ん中にある。前庭の仕上げはコンクリートであり、副屋では、西側に 3 間の煉瓦造倉庫があり、以前豚小屋であった現在タキギの納屋とする 2 間がある。南側には廃棄便所と金属造玉蜀黍(トウモロコシ)小屋があり、庭の東側には 2 個金属造と 1 個木造の玉蜀黍小屋が配置されている。トラクターなど農業用器具が庭に置いている。前庭より裏側敷地の畑はもっと広くで白菜と玉蜀黍が栽培されている。

事例 No. 49 の主屋は本来の一系列の建物から分かれた一部である。村内にこのような兄弟分家や政府分配などのきっかけで分けられた民家はかなり多く存在し、この事例は典型的な事例の一つである。

④ 事例 No. 26-1\_26-2\_26-3 (敷地面積:515.7 m<sup>2</sup> 主屋面積:147.3 m<sup>2</sup>)

No. 26-1(図 2)は一世代(M61)、No. 26-2 と No. 26-3 は二世世代家族(M40F41m18、F68)が利用している。敷地の間口(W)は 27.0m、奥行(D)は 19.1m、D/W は 0.7、敷地の形は横向きの長方形となる。南側に設ける門は道に接するため、モデル S-S に属し、1 軒の主屋と 3 軒の副屋により構成される家屋配置 IV 型である。

主屋は 1990 年に建替えた間口 19.9m、奥行 7.4m の 1 列 6 間の建物であり、三つの入口が設けられる。敷地の中には仕切り壁がない。

副屋について、庭の西側に 1 軒煉瓦造の倉庫、1 個金

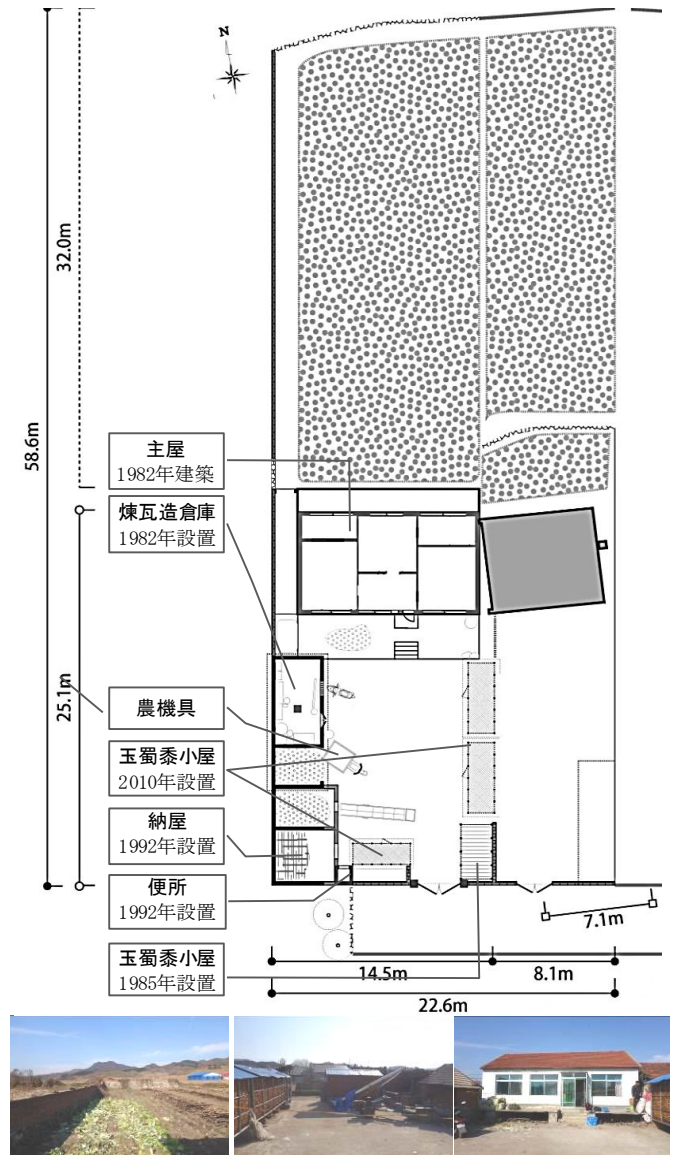


図 1 事例 No. 49 平面図と外観写真

属造の玉蜀黍小屋、簡易な浴設備と便所が設置されている。南側に 1 個金属造の玉蜀黍小屋と 2 軒煉瓦造の倉庫があり、門の東側に柴が置き、庭の東側に 2 個玉蜀黍小屋がある。庭が広く、鶏等の家禽を飼うだけではなく収穫後の玉蜀黍も庭で乾かしている。

この事例は No. 49 と同じ典型的な兄弟分家により元の建物を分けて利用する事例、違う所として敷地の入り口は 1 個のみ設けている。

Relationship between street composition and residential area in traditional Manchu village.  
Case study on Shengli village in Xinbin Manchu AutoNomous County of Liaoning Province, China

YANG Dan, USHIJIMA Akira, NAKAZONO Mahito

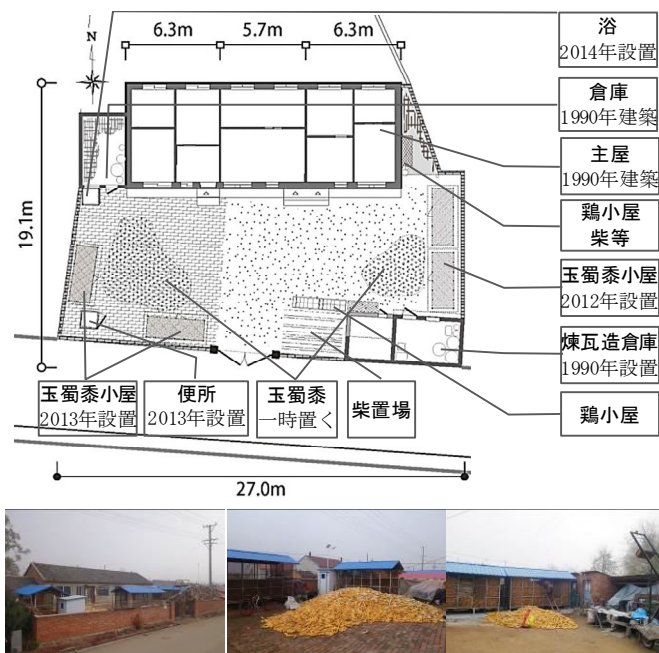


図2 事例 No. 26 平面図と外観写真

### 2.4 家屋配置V型事例

① 事例 No. 21\_41 (敷地面積:1587.8 m<sup>2</sup> 主屋面積:66.6+77.5 m<sup>2</sup>)

No. 21 と No. 41(図 3)は 3 世代家族(M76F74、M53F53、M29F27m6)が利用している。敷地の間口(W)は 40.3m、奥行(D)は 39.4m、D/W は 1.0、形は正方形である。敷地が東西方向の幅員 7m のコンクリート道と南北方向の幅員 3.4m の土道が交差している箇所があり、門が南に設け、モデル SW-S に属し、複数主屋より構成される家屋配置V型である。

祖父世代住んでいる主屋 No. 21 は 1984 年に農地で建築した間口 12.1m 奥行 5.5m の 6 間建物であり、親世代と子世代住んでいる主屋 No. 41 は 2008 年に一部の No. 21 を建替え、間口 12.7m 奥行 6.1m の 3 間建物である。土仕上げの庭にある副屋では、西側に 1 軒煉瓦造の倉庫、2 個木造の玉蜀黍小屋、2 軒馬小屋があり、西・南側に 2010 年まで豚を飼ったための豚小屋があり、南側に 3 個金属造の玉蜀黍小屋があり、東側に 1 軒煉瓦造の倉庫と 1 個木造の玉蜀黍小屋があり、庭の真ん中にも金属造の玉蜀黍小屋がある。主屋の西側に煉瓦造の倉庫、東側に農用機具置場がある。主屋の前に近年村内流行している夏用室外竈がある。

敷地の東北隅にある畑と裏側にある小さい畑で葱等野菜を作っている。他の民家と違いは、庭の前に広い畑もあり、白菜を植えている。

この事例では、典型的な子世代結婚する切っ掛けで元の建物の一部を建替える事例である。

② 事例 No. 16\_40 (敷地面積:1242.5 m<sup>2</sup> 主屋面積:64.7+98.6 m<sup>2</sup>)

No. 16 と No. 40(図 4)は 2 世代家族(M66F65、M40F42 f 18 m11)が利用している。敷地の間口(W)は 19.9m、奥行(D)

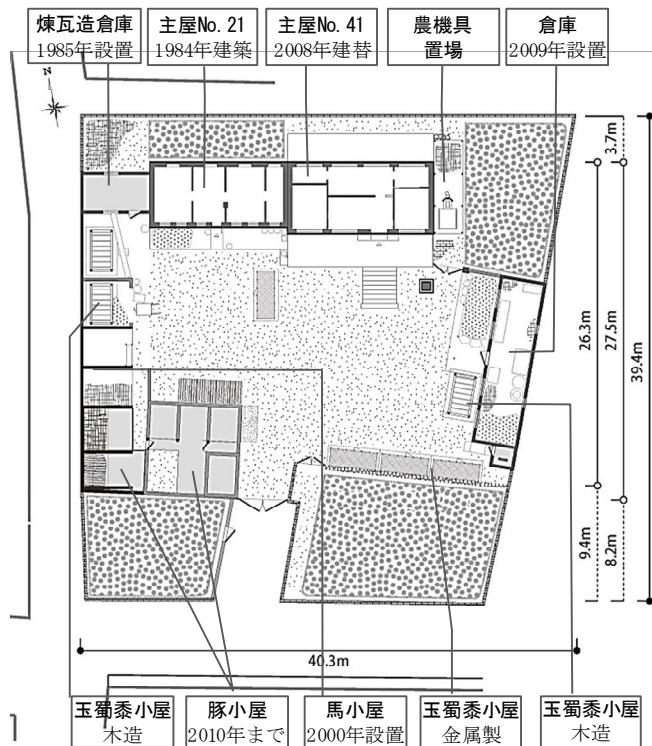


図3 事例 No. 21\_41 平面図と外観写真

は 51.9m、D/W は 2.6、形は縦向き長方形となる。敷地の東側に設ける門は幅員 5m のコンクリート道に接しモデル E-E・S に属し、複数主屋より構成される家屋配置V型である。

親世代住む主屋 No. 16 は 1981 年に菜園で建築した間口 11.7m 奥行 5.6m の 3 間建物である。主屋の東側に煉瓦造の倉庫があり、土仕上げの前庭の西側に 1 軒オートバイの置き場と西菜園へ通路として納屋、1 個金属造の玉蜀黍小屋があり、前庭の中央にトラックとショベルが置いている。主屋の西側の広い敷地に牛と羊を飼ったための小屋があり、西南隅と東南隅にそれぞれ便所と簡易な浴設備が設置される。家畜小屋の隣では木材を置いている。敷地の裏庭では白菜が植えられている。

子世代住んでいる主屋 No. 40 は 2008 年に建替えた間口 13.4m、奥行 7.4m の 3 間建物である。前庭に 2 個金属造の玉蜀黍小屋があり、調査の時玉蜀黍が一時的に庭に置き、玉蜀黍を満たされたトラックは庭中で止まっていた。

この事例は典型的な子世代結婚するために一棟新しい主屋を建築する事例である。

### 2.5 その他事例

① 事例 No. 1\_47\_27(敷地面積:1842.8 m<sup>2</sup> 主屋面積:81.4+85.9+70.8 m<sup>2</sup>)

No. 1\_47\_27(図 5)は元々 1844 年に建築され主屋 5 間東・西廂房それぞれ 3 間ずつと門房 5 間によって構成さ

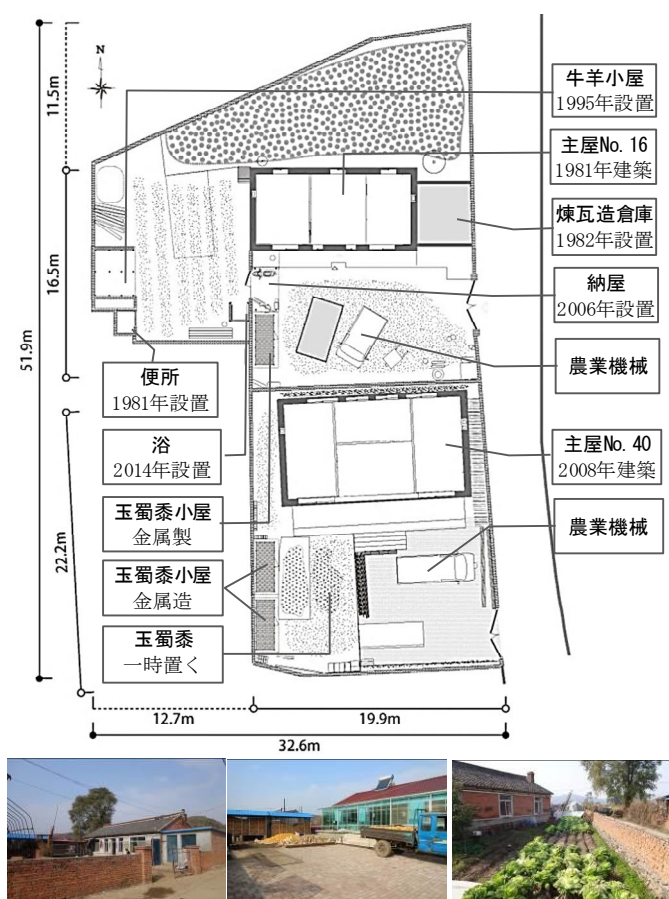


図4 事例 No. 16\_40 平面図と外観写真

れた伝統的な満族四合院である。1950年代に No. 47 と No. 27 は政府より他人に分配され、現在三つ家族が利用し敷地も三つの部分に分けられている。

No. 1 では、現在県級伝統満族民居保護建築に登録されている。敷地の間口(W)は 15.1m、奥行(D)は 45.5m、D/W は 3.0、形は縦向きの長方形である。敷地の南側に設ける門は幅員 4mの道に接しモデル S-S に属している。主屋は元々主屋の厨房と東側寝室の部分であり、庭の東側に 2 軒の煉瓦造の廂房、1 個の木造の玉蜀黍小屋と 1 本の索倫竿がある。

No. 47 は元々主屋の西寝室で 2014 年に建替え 3 間の建物であり、2 世代家族 (M68F66、M38F33m8) が利用している。敷地の間口(W)は 23.8m、奥行(D)は 25.8m、D/W は 1.1、形はほぼ正方形となる。敷地の南側に設ける門も幅員 4mの道に接し、モデル S-S に属している。主屋の西側にある副屋は、北から順番で 2 個玉蜀黍小屋、1 軒木造の小屋、4 間煉瓦造の倉庫が並び、農用トラクターが玉蜀黍小屋の前に止まっている。前庭の南側に柴を置き、主屋の東側前方に簡易な浴設備があり、主屋の裏側に奥行 6.2mの敷地で大根等野菜を作っている。

No. 27 は元々の西廂房で 1990 年に建替え 3 間の建物であり、2 世代家族 (F68、M47m27) が利用している。敷地の間口(W)は 20.7m、奥行(D)は 23.0m、D/W は 1.1、形はほぼ正方形となる。敷地の南側に設ける門も幅員 4mの道

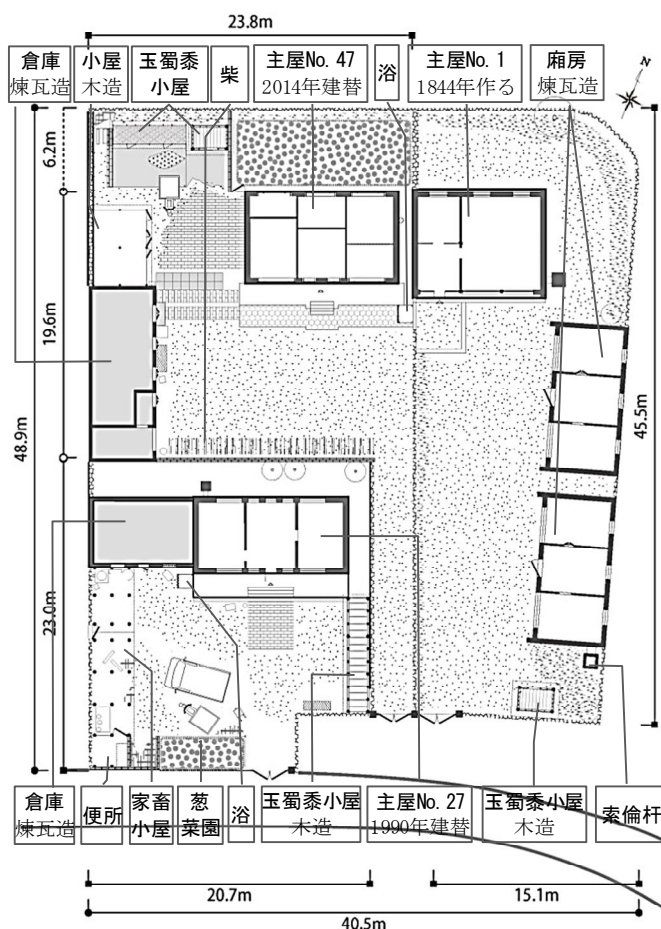


図5 事例 No. 1\_27\_47 平面図と外観写真

に接し、モデル S-S に属している。副屋について、西側に北から順番で 1 軒煉瓦造の倉庫、1 軒物置小屋、昔の馬小屋と便所が並び、庭の東側に 1 個木造の玉蜀黍小屋がある。庭の南側に横向きの長方形の畑で葱を作り、主屋の西側前方に簡易な浴設備が設置される。

No. 1\_47\_27 は政府 (政策) によって分割された事例の一つであり、村内でこのような事例が少なくないが、敷地の一部が保護され、伝統的な満族民居の様子がまだ見える事例は此方しか残っていないため、典型的な事例だと考えられる。

② 事例 No. 34\_8-1\_8-2\_8-3\_8-4(敷地面積:2675.2 m<sup>2</sup> 主屋面積:113.4+57.3+38.6+57.0+39.0 m<sup>2</sup>)

No. 8-1\_8-2\_8-3\_8-4(図 6)は政府が 1960 年代に農地で建築し 1980 年代に村民に販売された大規模な四合院の一部であり、他のはもう建替えられた。村内に 1960 年代の住現状を維持し、数戸の家族は連棟的な建物で居住する事例として此方しかない、各家の敷地の幅は部屋の間口と同じく縦向きの細長い長方形になっている。また、No. 8-3 と No. 8-4、No. 8-1 と No. 34 は村内にある親世代と

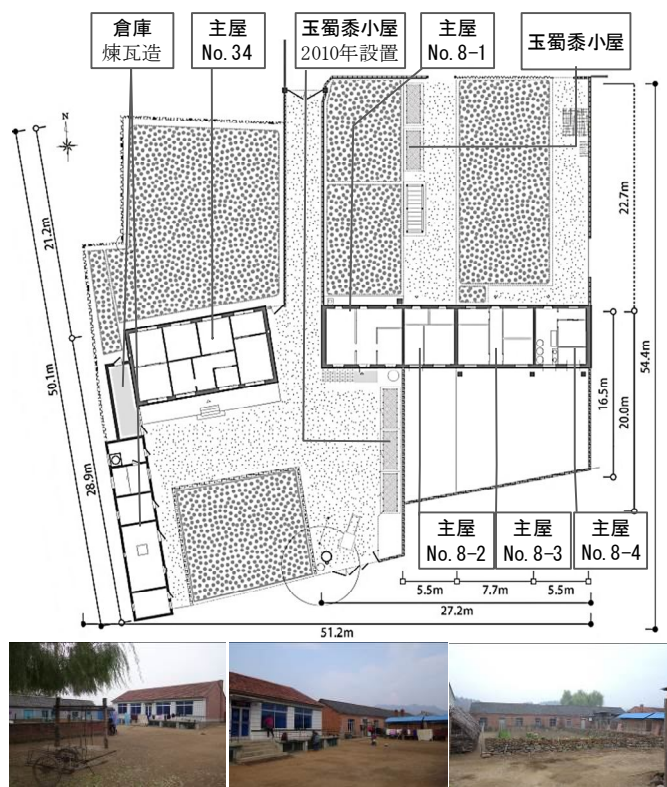


図6 事例 No. 34\_8-1\_8-2\_8-3\_8-4 平面図と外観写真

子世代生活の事例である。

No. 8-1 と No. 34 は1つ敷地で、事例 No. 16\_40 と同様に子世代結婚するために一棟主屋を新築することとなる。No. 8-1 は親世代 (M59F58)、No. 34 は子世代 (M36F33m4) が利用している。敷地の間口 (W) は 32.5m、奥行 (D) は 50.1m、D/W は 1.5、形は縦向きの長方形となる。敷地の北側に設ける門は幅員 2.5mの道に接しモデル N-N・S に属している。親世代住む主屋の間口は 8.9m、奥行は 6.5m であり、子世代住む主屋は 1998 年に建替えた間口 14.8m、奥行 7.6m の 4 間建物である。副屋として、西側に一列の煉瓦造建物があり、北から順番で 2 間は炕が有する休憩用の部屋、1 間は蹄鉄を作る部屋と 3 間の物置が並んでいる。東側に 3 軒の物置が設置されてある。庭の東南隅に馬に蹄鉄を打つ場所であり、隣は白菜、大根を植える畑である。主屋の裏側の広い畑では玉蜀黍を栽培している。

No. 8-2 は 1 世代家族 (M86F78) が利用している。敷地の間口 (W) は 5.5m、奥行 (D) は 42.7m、D/W は 7.8、形は縦向きの細長い長方形である。敷地の北側に設ける門は幅員 2.5mの道に接し、数が少ないモデル N-N に属している。主屋は No. 8-1 と同じ 1966 年に完成し間口 5.5m、奥行 6.5m である。主屋の北側庭には 1 個木造の玉蜀黍小屋と 2 個金属造の玉蜀黍小屋があり、主屋の南側敷地で葱、白

菜等を作っている。

No. 8-3 と No. 8-4 は 1 つ敷地で 2 世代家族 (M70M43F43m19) が利用している。敷地間口 (W) は 13.2m、奥行 (D) は 39.2m、D/W は 3.0、形は縦向きの細長い長方形である。敷地の北側に設ける門も幅員 2.5mの道に接し、No. 8-2 と同じモデル N-N に属している。主屋も 1966 年に完成し間口 13.2m、奥行 6.5m である。主屋の北側の畑で白菜、葱等作り、主屋の南側の敷地でも野菜を作っている。

### 3. まとめ

本論文では、前編の続き今回調査した 14 軒民家の中で家屋配置は V 型とその他に属する 6 例の宅地形状、面積、接道と配置特徴を着目し、得られた知見は以下の通りである。

- 1) 主屋が複数ある V 型は一般的に息子結婚のきっかけで、一棟主屋が新築する又は元々の主屋の一部が建替えられることが主な誘因となる。前編の事例の中で息子結婚した後元の一棟の主屋を分割し、分けて利用する民家 (No. 48、No. 15) の主屋の面積が V 型より小さい。
- 2) 元々大きな敷地が分割された事例について、特定な年代に残された歴史特徴が有する。例えば、前世紀 50 年代に行った土地改革及び 80 年代に行った改革開放などの国家政策の影響を受け、本来の大規模の敷地が分割されることを引き起こした。

#### 参考文献

- 1) 王其亨 (2005), 風水理論研究, 天津大学出版社
- 2) 张小琼他 1 名 (2004), 满族 (辽宁新宾县腰站村调查), 云南大学出版社
- 3) 张驭寰 (2009), 吉林民居, 天津大学出版社
- 4) 杨英杰 (1991), 清代满族风俗史, 辽宁人民出版社
- 5) 陈伯超 (2001), 满族民居建筑, 满族建筑文化国际学术研讨会论文集, pp. 1-10

\* 山口大学大学院理工学研究科 博士後期課程 建築学修士

\*\* 山口大学大学院創成科学研究科 助教

\*\*\* 山口大学大学院創成科学研究科 教授・工博

\* Doctoral Course, Graduate School of Science and Eng., Yamaguchi Univ.

\*\* Assistants Prof., Graduate School of Sciences and Tec. for InNovation, Yamaguchi Univ., Japan

\*\*\* Professor, Graduate School of Sciences and Tec. for InNovation, Yamaguchi Univ., Japan